

山さん 氣き

宮坂静生



大寒の直方体の山気かな
雪嶺に弾き飛ばされわれ欠片
雪嶺がぼいぼいと哭くだれかの忌
まぼろしの満洲
霜柱らくらくと踏む楽土なし
みのむしの玉門関に日向ぼこ
枯柿に日のあそびるる干戈絶て

サララップ林檎切口夢心地

冬至柚子三晩つゞけて泳がすよ

百歳の下鉢清子さんに東明雅忌の句あれば

師に賜はる藪虱とはよき渾名

八百年揚げつゞけたる隠岐の凧

昨年、隠岐の島へ行った。歌人・俳人が集まり、後鳥羽院遷幸八百年記念シンポジウムをやった。承久の乱の敗北により都から隠岐へ流された後鳥羽院は十九年間、京へ帰ることをひたすら願ひ、島で亡くなる。

支配者の身分を剥奪され、一人の出家、いや人間になった者の孤独とは想像を絶する。世の中は捨てた、都は遠退くと院は「遠島百首」に詠みながら、千々に乱れ涙に明け暮れる。

掲句の「凧」は私の隠岐での幻想である。隠岐の人たちが後鳥羽院を八百年も慕い続けるのは、人間の孤独な哀しみへの共感であろう。

元禄の芭蕉も後鳥羽院のことばに深く打たれている。加藤楸邨が芭蕉のことばに導かれ、大戦が始まる昭和十六年に隠岐へ来て句集『雪後の天』を残す。自省の深さに感動する。

(産経新聞 一月五日付)